

○宮田 興子¹

¹神戸薬大

医薬品が投与されると生体内物質に影響を与えて薬理作用を示すが、これらは主として有機化合物同士の相互作用である。医薬品の吸収、代謝も有機化合物の生体内変化と言えるため、一般的な有機化学反応の応用と考えられる。医薬品が生体内のどの受容体や酵素に結合して主作用や副作用を発現するかは、その医薬品の構造が重要な役割を担っている。また、病態も生体内物質の動向や量の変化によって引き起こされるとも考えられるので、有機化学の視点で見ることができる。大学時代に有機化学を習得している薬剤師は有機化学の視点で臨床を眺めることのできる医療人といえる。このように、医療に有機化学的な概念を導入することが、*pharmaceutical care* の重要な点の一つではないかと考える。

現在、臨床現場と有機化学をつなぐための2つの勉強会を行っている。1つ目は病院および薬局薬剤師として業務に携わっている卒業生と「基礎薬学力で臨床薬学力に磨きをかけよう」という趣旨のもと、臨床現場での様々な疑問点を卒業生が提示し、それらを参加者全員で考えていく勉強会である。特に構造が読めたら、どんな疑問をどのように解決できるかを話し合っている。2つ目は、本学主催卒後研修講座の症例検討会である。この会の特徴は、最後に医師の立場から、また薬学の特徴である有機化学の分野からコメントを行う点である。これら2つの勉強会を通して薬剤師が研究のテーマを見出し、基礎薬学に立脚した薬剤師主導型研究を立ち上げてくれることを願っている。